テーマ３：図書館と学内他部門及び教員との連携による課題解決を考える（教育・学習支援）

学生の将来につながる情報リテラシー教育 ～神輿で国試のその先へ～

平成28年度大学図書館職員短期研修（東京会場）第6班
（平館、清水、花田、筆谷、中野、松野）

背景、目的、目標

背景

- 国家試験に合格した学生のケース
- 国試対策で忙しく、また必要に迫られないと取り組まない。

目的

- 学部生のうちに学生に情報リテラシーを持たせる。
- そのような学生を社会に送り出す。
- 授業の中に組み込むことで、学生の負担を極力増やさず、情報リテラシーを身に付けられるようにする。

目標

- 情報リテラシー教育をカリキュラムに組み込む。
- 情報リテラシーが身に付けることで社会に出ても役立つ人材を育てる。
→そのことで大学の魅力アップ＆入学者増へ。

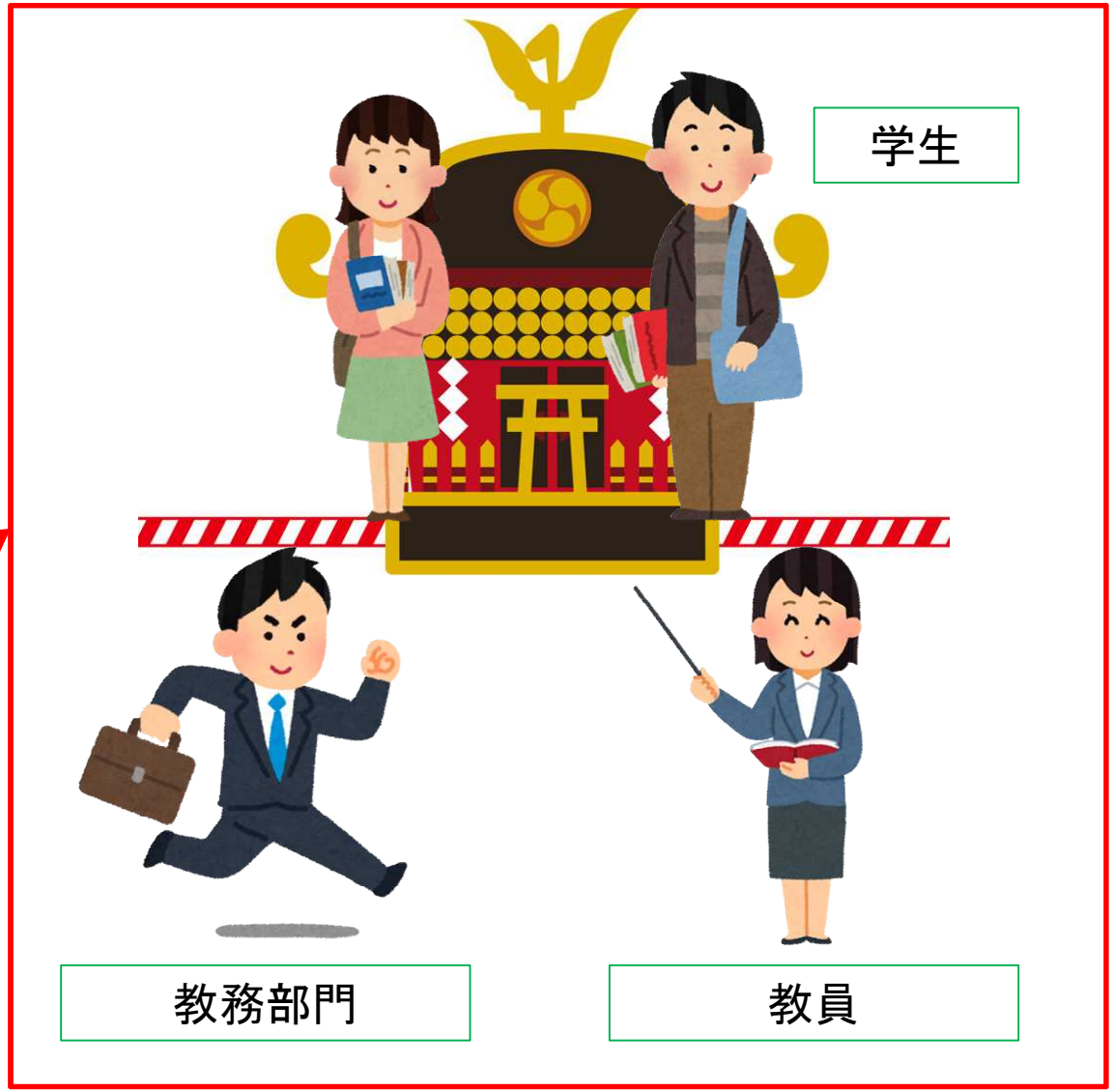
情報リテラシー教育（案）

- 将来現場で起こる問題を解決するために必要な課題を設定し、その解決法を教授する。
- 図書館が必要になる課題を出す。
- 学年・専攻等別に課題のレベルを設ける。
  レベルに応じて到達度の基準を設ける。
- 必修授業に組み込む。

実現するために（お神輿モデル）

Before

図書館



実現するために（お神輿モデル）

After

ボトルネックと解決策（学生）

ボトルネック

- 能動的には取り組まない。

解決策

- 教員に授業の中で、図書館が必要になる課題を出してもらう。
- 単位要件にしてもらう。

ボトルネックと解決策（教務部門）

ボトルネック

- カリキュラム部門（教務部門）との距離が遠い。

解決策

- 教務部門の業務を支援する。
- 図書館員が教務部門に異動する。

→しかし職員だけでは、カリキュラムに組み込むのは困難。
→教員との連携が必要。

ボトルネックと解決策（教員）

ボトルネック

- 教員との距離が遠い。

解決策

- 図書館から教員に資料を提供する。
- 図書館から教員に企画を提案する。
- 教員へのレファレンスサービスを積極的に行う。
- 授業を見学に行く。
- 日常的にコミュニケーションをとる（廊下で声を掛ける、食事を共にする）。

→いずれもヘビーユーザ・委員など、「敷居の低い教員」から始める。

ロードマップ

1. 教員との関係を作る。
2. 敷居が低い教員から始める。
3. 実績を作る。
4. 実績をもとに、カリキュラムに組み込む。

その他の連携先

- 広報部門（広報、入試、キャリア支援部門）
  図書館の活動を大学自体の広報へ

実現するために（お神輿モデル）

After

まとめ

- 対象
  国試で忙しい学生

- 課題
  国試対策以外に能動的には取り組まない。

- 方策
  情報リテラシー教育をカリキュラムに組み込み単位,進級,卒業要件とする。

- メリット、ボトルネックとその解決法
  【メリット】
  ・学生の質が上がる。（大学全体のメリットを主眼に置く）

  【ボトルネックとその解決法】
  ・他部署の理解が得られるまでには時間がかかるので、
  粘り強く取り組む。
  →その際には、大学のブランド力強化を共通の目標とする。
  →そのためには、まず教育の核を担う教員の協力を得る。

イラスト画像

- お神輿(http://01.gatag.net/0009602-free-illustraition/)
- 上記以外各種(http://www.irasutoya.com/)